

聖書：ガラテヤ 4：8～20

説教題：キリストが形造られるまで

日時：2013年1月27日

ペテロは4章7節までにおいて、福音の恵みについて語って来ました。そのメッセージは7節に示されていますように、「奴隷から子へ」ということです。約束の子孫であるイエス・キリストが現れて、その方に信頼するまでの私たちは奴隷状態にありました。律法によって罪を示され、その基準をクリアしようともがいても、それを果たすことができないみじめな束縛状態にありました。しかしキリストが来てくださったことによって、この方に信頼する者は律法の下から解放されています。キリストがすべての義を満たし、また私たちの代わりに呪いの木についてくださったので、キリストと結ばれた私たちは、律法の要求を全部満たした者とされたのです。そればかりか、キリストが持つ神の子どもという栄えある身分にまで引き上げられた。それゆえ今や奴隷ではなく、子として「アバ、父よ」と大胆に神を呼びながら近づき、神との交わりに生きる祝福に導き入れられている。この素晴らしい福音を示した上で、パウロはガラテヤ人たちの状態へと目を向けます。

まず8～11節でパウロが言っていることは、あなたがたはなぜ再び奴隷状態へ戻るような愚かなことをするのかということです。ガラテヤ人たちは異邦人であり、かつては本来は神でない神々の奴隷状態にありました。そこから福音を通して、まことの神を知る者へ導かれました。パウロはその際、あなたがたは「今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに」と言います。これは彼らが神を知るより先に、神が彼らを知ってくださったという恵みの事実が先立つということです。神がまず彼らを愛してくださったので、その恵みに基づいて彼らは神を知る者へと導かれた。なのにあなたがたはあの無力で無価値な幼稚な教えに逆戻りしている！興味深いことは、ガラテヤ人たちはユダヤ主義者たちに導かれて割礼を受け、律法を守るというユダヤ人の生活へ進んでいるのに、パウロは「逆戻り」と言っていることです。10節の「あなたがたは、各種の日と月と季節と年とを守っています。」という言葉は、彼らがユダヤ人の様々なカレンダーを宗教的義務として守り始めていたことを指すと思われます。彼らはそれを守ることによって神の前で義とされよう、神に正式に受け入れられる者となろう、としていた。しかしそれは自由を与えるキリストを捨て、自分の行ないによって神との正しい関係に立とうとすることであり、以前の生き方への逆戻りである、と。パウロはそんな彼らに対して、「あなたがたのために私の労したことは、むだだったのではないか、と私はあなたがたのことを案じています。」と自分の胸の内の苦しい思いを吐露しています。

そんな彼らにパウロはアピールします。12節：「お願いです。兄弟たち。私のようになってください。私もあなたがたのようになったのですから。あなたがたは私に何一つ悪いことをしていません。」 私たちはこのようなパウロの言葉を読むと、私はとてもこうは言えない、「私のようにはならないでください！」とは言えるが・・・、と思います。しかしパウロが言っていることは、私のようにただキリストに救いを見出し、律法の束縛から解放され、神の子どもとされた自由の中に歩む者になってくださいということです。パウロはこのアピールを強めるた

めに、かつてガラテヤ地方を訪れた時の経験を思い起こさせています。二つのことに彼は触れています。

一つは「私もあなたがたのようになりました」。これについて良く解説してくれるのは 1 コリント 9 章 19～23 節でしょう。パウロは「私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。」と言い、ユダヤ人にはユダヤ人のように、律法を持たない人々に対しては律法を持たない者のように、弱い人には弱い者に、すべての人にすべてのものとなった、と記しています。それは何とかして、幾人かでも救うためである、と。もちろんパウロは福音の真理については一切妥協しなかった人です。しかし彼の宣教の仕方は、より良く福音を伝えるために、その人々の世界に入って行き、その人々の使っている言葉で、その人々の生活様式の中で福音を語るということでした。自分を保ったまま、相手が自分に合わせることを要求するのではなく、進んで相手の様々なやり方に自分を合わせて、キリストを伝えた。これはキリストにある自由を本当に持っている人こそができることでしょう。

もう一つパウロが思い起こしている経験は、ガラテヤ人たちはパウロを心からの喜びを持って迎え入れてくれたことです。13 節でパウロは、自分がガラテヤ地方を訪れたのは、私の肉体が弱かったからだと言っています。そしてその肉体の問題は、あなたがたにとって試練となるものであったとさえ言われています。これについてはマラリヤ熱、てんかん、目の病氣、II コリント 12 章で「肉体のとげ」と言われていること、など色々な推測がなされていますが、決定的なことは分かりません。しかし言えることは、肉の感覚では受け入れがたい何らかの問題がパウロにはあったということです。そういう意味でパウロは外見上、魅力的な人とは言えない面があったのでしょう。ユダヤ人は健康であることや富を持つことは、神の祝福のしるしと考えましたが、それとは反対の方向を示すパウロの姿があったのです。ところがガラテヤ人たちは、そんなパウロを軽蔑したり、嫌ったりせず、かえって神の御使いのように、さらにはキリスト・イエスご自身を迎えるかのように迎えてくれた。それは彼らが外見で判断せず、その御言葉に聞き入ったからです。今日もともすると、私たちは福音を語る人が外見的にどうか、センスの良い身なりをしているか、目立つ才能を持っているか、等によって判断しやすいのですが、ガラテヤ人たちは見た目ではなく、語られた御言葉の中身に注目してパウロを受け入れたのです。15 節の「目をめぐり出して与えたいとさえ思った」とは、必ずしもパウロの問題が目にあったということではなく、自分の最も大事なものを差し出す用意があったという意味のようです。彼らは喜んで福音を受け入れ、キリストを受け入れ、またキリストを伝える人を受け入れたのです。それはとてもハッピーな伝道者と主の民の関係と言えます。

ところがその彼らが今や全く方向転換してしまった。16 節には「敵」という言葉さえ出て来ます。ガラテヤ人たちはユダヤ主義者たちに扇動されて、今やパウロを疑いの目で見、敵対的な振る舞いさえ取る状態に変わりつつあったのです。パウロの心の痛みはどれほどのものだったと言うべきでしょうか。

パウロはユダヤ主義者たちを指して、17 節で「あなたがたに対するあの人々の熱心は正し

いものではありません。」と言います。彼らは何を求めているかと言えば、それはあなたがたを自分に熱心にならせようとする事である。自分の弟子、自分の勢力、自分の手柄、自分の名誉を得ようとして、彼らは熱心になっている。しかしパウロは 18 節で言います。「良いことで熱心に慕われるのは、いつであっても良いものです。それは私があなたがたといっしょにいるときだけではありません。」ここで慕われる側として考えられているのはガラテヤ人であると思われます。パウロは良いことであなたがたが熱心に慕われるのなら良い、と言っています。つまりパウロは暗に、ユダヤ主義者たちは良いことであなたがたを慕っているのではないと言っているのです。逆に悪をもたらすことのためにあなたがたを慕っている、と。そしてここにはパウロの心の広さも示されています。18 節後半に「それは私があなたがたといっしょにいるときだけではありません。」とあります。パウロはガラテヤ人たちと共にいた時、もちろん良いことで彼らを熱心に慕いました。しかし彼は、それができるのは自分だけだとは言っていないのです。良い熱心を持って関わる人がいるなら、自分以外の人でも良いのです。パウロはユダヤ主義者たちと違って、ガラテヤ人たちを自分の専有物などとは毛頭思っていないのです。

ではパウロはどんな良い熱心を持って彼らに関わっているのでしょうか。それが 19 節に示されています。すなわち「あなたがたのうちにキリストが形造られる」ということです。キリスト教が提供する救いは、単にさばきからの救いと、罪の赦しだけではありません。この福音が目指しているのは、これを受け取った人がキリストの似姿にまで造り変えられて行くことです。私たちを見た人がまるでキリストご自身を見ているかのように思う、そういう人になることです。それは福音を通してキリストを見つめ、キリストと交わり、キリストに倣う歩みによって少しずつ導かれて行くことでしょう。そのことをひたすら願って、そのために産みの苦しみをしている、とパウロは語ります。彼がどんなにこのために苦心し、心砕いているかは、20 節にも現れています。「それで、今あなたがたといっしょにいたことができたなら、そしてこんな語調でなく話せたらと思います。あなたがたのことをどうしたらよいかと困っているのです。」

このようなパウロの言葉を見る時に思うことは、このパウロに限らず、パウロと同じように心を砕いてくれた信仰の先輩たちの働きがあって、私たちは福音をしっかりと持つ者とさせられたということです。私たちが決して自分一人の力でここまで来たのではないでしょう。私たちが今、こうして信仰に立っているのは、ガラテヤ人に対するパウロのように、愚かでなかなか成長しない私のために陰で祈り、忍耐し、苦心しながら導いてくださった先達たちがいたからではないでしょうか。私に福音を伝えるために、私に合わせ、私に分かるように示し、私の関心事にも関心を持ち、私と同じ立場と一緒に立とうとしてくださった人々。そして自分に熱心にならせるのではなく、キリストを指し示し、私がキリストにこそ結び付いて、私の内にキリストが形造られるようにと心注いでくださった人々。そのような私たちの導き手、また先輩クリスチャンたちのまさに産みの苦しみを頂いて、あるいは 20 節にあるようなうめぎのとりなしを頂いて、今かくある自分であることを思わされるのではないのでしょうか。

私たちはこのことを覚えて二つのことを心に留めたいと思います。一つは私の目指すべき目標はパウロが語っているように、キリストが私のうちに形造られることであるということです。キリストを信じて天国行きの切符を手に入れたというところで止まっていたはならない。目標は私がキリストのようにまでなること、キリストを映し出すような者となること。そのために純粋な御言葉を聞き続け、それを喜んで受け入れることを大切にしたい。ガラテヤ人たちが最初、パウロの外面的なことに邪魔されずに御言葉に集中したように、私たちも他のどんなことによっても邪魔されず、真実な福音にこそ喜んで耳を傾け、かの目標に向かって前進する者でありたいと思います。

そしてもう一つは、私たちもこのパウロや私たちの信仰の先輩たちに倣う者となるということです。パウロはガラテヤ人たちを導くのに、このように労苦し、仕えてくれました。またパウロだけでなく、私たちを導き、関わってくれた人々も、私のためにどんなに外には見えない祈りと奉仕をささげてくださいましたことでしょう。私たちはそのことを感謝し、今度は自分自身もまたその後続く者となって、福音のために仕える者となることを祈り求めたいと思います。周りの人々を幾人かでも救うために、自己主張するのではなく、むしろキリストにある自由をその人々の救いのために用いる。真理を曲げはしないが、相手の立場へとへりくだって入って行き、その人がキリストを受け入れるためには何でも喜んでする。そして自分に引き付けるのではなく、御言葉においてキリストを指し示し、何よりもキリストがその人の内に形造られることを祈り求める。そうしてこの素晴らしい福音が広まり、多くの人々に救いがもたらされ、神に栄光が帰されることのために仕え、また用いていただく特権と喜びに生かされたいと思います。